（別紙様式＝中学校用）

| 都道府県番号 | 3 |
|---|---|
| 都道府県名 | 岩手県 |

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）　【　①□　②■　③□　】

| 学校名 | 二戸市立仁左平中学校 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　年 | １年 | ２年 | ３年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 1 | 1 | 1 | 0 | 3 | 7 |
| 生徒数 | １４ | １４ | １８ | 0 | ４６ | |

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

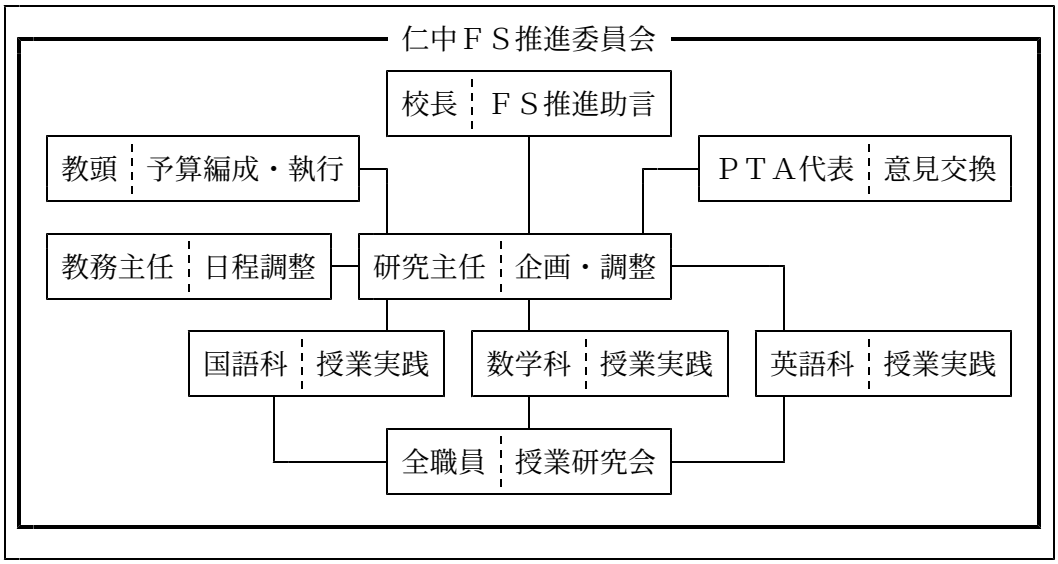
個に応じた指導法の工夫

２．研究主題設定の趣旨

学習指導要領の内容の理解が十分ではない生徒には、繰り返し指導など補充的学習によってつまずきを克服し、理解が十分な生徒には、その理解をより深める等の発展的な学習により、さらに力を伸ばしていく必要があることから、本研究主題を設定した。

Ⅲ　研究の概要

(1)　研究推進体制の工夫




(2)　研究の実際

①　知能検査・ＮＲＴ・ＣＲＴ等の結果の客観的資料に基づく生徒の実態把握と分析を行った。

②　理解や習熟の程度に応じた指導方法の工夫をした。

基礎・基本の定着がなされていない部分の単元等の指導方法の工夫（短い期間

の指導）と 補助的な取組（長い期間の指導）を継続的に行った。

③　教科の枠を超えた基礎・基本の定着を図る指導方法の工夫を行った。

・　どの教科も教科書を読むことが必要なことから、教科書の読みの指導方法の工夫を行った。（教科の枠を超えた指導）

④　教育課程と指導方法の工夫を行った。

・　２年選択数学の補充コース・発展コースの設定とコース毎の指導方法の工夫を行った。

⑤　個々の生徒に最適な家庭学習方法の探究・確立をさせた。

・　総合的な学習の時間において、個々の生徒に最適な家庭学習の方法（予習・復習）の探究・確立をさせた。

(3)　研究の成果と課題

①　成果

ア　知能検査・ＮＲＴ・ＣＲＴ等の結果の客観的資料に基づく生徒の実態把握と分析を行った。

(ア)　知能検査の結果に基づく生徒の実態把握と分析

(イ)　ＮＲＴの結果に基づく生徒の実態把捉と分析

ＮＲＴの結果から、基礎・基本の定着がなされていない部分として、次の(大)領域があげられる。

・　第２学年の数学において、数と式が落ち込んでいる。

・　同じく英語において､話すこと・読むこと・書くことが落ち込んでいる。

(ウ)　ＣＲＴの結果に基づく生徒の実態把握と分析

ＣＲＴの結果から、第１学年の国語・数学（算数）において、基礎・基本の定着がなされていない部分は、数学的な考え方である。

イ　理解や習熟の程度に応じた指導方法の工夫をする。

基礎・基本の定着がなされていない部分の単元等の指導方法を工夫し補助的な取組を継続的に行う。

(ア)　国語における実践（その１）

・　実施学年　第２学年

・　成果

授業の中で、課題を明確にし、課題解決のための取組方を具体的に指示していくことで成果があげられた。生徒の変容について、ＮＲＴの結果に基づき、数値で示す。

国語における第２学年のＮＲＴの結果の比較

| 領域　項目 | 2003/03 実施 | → | 2003/11 実施 | 数値比較 |
|---|---|---|---|---|
| 書くこと | １１１ | → | １２２ | ＋１１ |
| 読むこと | １０３ | → | １０８ | ＋　５ |

・　考察

心情の読み取りは、課題の設定の仕方とその取組方（細部に注意した心情描写の読み取り）を継続することで高めらることがわかった。

(イ)　国語における実践（その２）

①と同様に第１学年で指導を行い、次のような成果を得た。

授業の中で、課題を明確にし、課題解決のための取組方を具体的に指示していくことで成果があげられた。

国語における第１学年のＮＲＴの結果の比較

| 領域　項目 | 2003/07 実施 | → | 2003/11 実施 | 数値比較 |
|---|---|---|---|---|
| 書くこと | １２３ | → | １２９ | ＋　６ |
| 読むこと | １００ | → | １１３ | ＋１３ |

文の構成については、学期毎に説明文の指導を通して理解を高められることがわかった。

(ウ)　数学における実践

・　実施学年　第２学年

・　成果

検算を必ず書かせるようにした結果、計算ミスに気づくことができるようになり、正答を導き出せる場面が増えた。

数学における第２学年のＮＲＴの結果の比較

| 領域　　項目 | 2003/03 実施 | → | 2003/11 実施 | 数値比較 |
|---|---|---|---|---|
| 数と式 | ７３ | → | １１０ | ＋３７ |

・　考察

昨年度までも検算をするように指導してきたが、生徒まかせで、書かせるところまでは徹底していなかった。検算を書かせることによって、生徒の思考をフイードバックさせ、計算ミスに気付くことができる力も向上させていると考えられる。

(エ) 英語における実践

・　実施学年　第２学年

・　成果

意味の区切りをあらかじめ示し、区切りを意識させて継続的に音読させることで、一つ一つの単語を、まとまった意味のある文章として具体的にとらえさせることができた。

英語における第２学年のＮＲＴの結果の比較

| 領域　　項目 | 2003/03 実施 | → | 2003/11 実施 | 数値比較 |
|---|---|---|---|---|
| 話すこと | ８０ | → | １１０ | ＋３０ |
| 読むこと | ８９ | → | １０９ | ＋２０ |

・　考察

文章を構成している意味のある単語のまとまりを正しく識別できるようになれば、文全体を正しく認識できるようになり、文全体を正しく認識し、文章全体の把握を容易にすることができるようになる。

ウ　教科の枠を超えた基礎・基本の定着を図る指導方法の工夫を行う。

どの教科も教科書を読むことが必要なことから、教科書の読みの指導方法の工夫を行う。（教科の枠を越えた指導）

エ　教育課程と指導方法の工夫を行う。

２年生選択数学の補充コース・発展コースの設定とコース毎の指導方法の工夫を行う。指導の領域は、「数と式」。指導の時間は、２０時間である。

オ　個々の生徒に最適な家庭学習方法の探究・確立をさせる。

総合的な学習の時間において、グループテーマ研究として取組、個々の生徒に最適な家庭学習の方法（予習・復習）の探究・確立をさせた。

②　今後の課題

ア　知能検査・ＮＲＴ・ＣＲＴ等の結果の客観的資料に基づく生徒の実態把握と分析を行い、知能と学力の相関、生徒の実態把握と分析を行うことができた。個々の生徒に視点をあてた分析を十分に行い、理解や習熟の程度に応じた指導方法の工夫の際に生かしたい。

イ　基礎・基本の定着がなされていない部分の理解や習熟の程度に応じた指導方法の工夫を行い、定着の状況が改善された。個々の生徒に視点をあてた実態の把握を行いたい。

ウ　どの教科も教科書を読めることが必要なことから、教科書の読みの指導を朝学習を活用して行いたい。

エ　選択教科を効果的に設定し、補充・発展コースの指導法を工夫したい。

オ　家庭学習における日常の予習・復習の他に長期的な見通しをもった計画の立て方・学習方法の指導を行いたい。

(4)　研究成果の普及の方策

県推進会議、地区研究推進会議及び二戸管内の学力向上フロンティアスクールの取組状況を冊子にまとめ発行することで研究成果の普及を図る。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　☑ ３学級以下　□ ４～６学級
□ ７～９学級　□ １０～１２学級
□ １３～１５学級　□ １６学級以上

【指導体制】　□ 少人数指導　□ Ｔ．Ｔによる指導
☑ その他

【研究教科】　☑ 国語　□ 社会　☑ 数学　□ 理科
☑ 外国語　□ 音楽　□ 美術　□ 技術・家庭
□ 保健体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　□ 有　☑ 無

【特色ある取組事例として紹介したいポイント】
○　教科の枠を超えた基礎・基本の定着を図る指導方法の工夫
○　選択教科を生かした教育課程と指導方法の工夫
○　個々の生徒の実態に応じた家庭学習の確立